

## 上半期ブロック会議報告

6/21～22 JA 魚沼みなみをうけ入れ産地として、関東・中部ブロック会議、7/17～18JA みどりのをうけ入れ産地として東北・北海道ブロック会議、9/1～2 西日本有機農業組合のやさか共同農場を受け入れ産地として、関西以西ブロック会議が開催されました。

会議での意見交換、講演等の概要をご報告させていただきますので、ご覧下さい。

尚、詳細な議事録等、ご希望でしたらお手数ですが事務局までお問合せ下さい。

### 《関東・中部ブロック会議》 6/21～22 受入産地：JA 魚沼みなみ 参加者 89 名



#### ◎ ブロック会議にて出された意見

Q. エコチャレンジとコア・フードの逆転現象がある。価格是正について検討を望む

A. 認知度高める取り組みを計画している。秋の人参キャンペーンなどを予定。

Q. エネルギー問題について消費者と考え方の整理を行う必要がある。

A. 良い提案を頂きました。放射能低減の基金を設けており、1億5千万すべてを使わない。そこで自然再生エネルギーの活用を支援する取り組みをしたいと考えている。ただし、復興支援なので被災地対象となる。廃油燃料使用など取り組みしている産地もあるので、検討して行きたい。

Q. ネオニコの位置づけはどう考えているか。講師を呼び学習会も行われたその時点での結論は。

A. 結論は出ていない。ネオニコには組合員からも声が寄せられている。先日の講師は葉環境面での研究をしており、人体面での研究者ではない。現在、ネオニコについて研究している専門家のほとんどいない状況。考え方として禁止という観点ではなく、一緒に他の方法と技術を考えていくようにしたい。

Q. 昨年の震災で代替供給があったが、返品がほとんど無かったことに逆に驚きがあった。「こだわり」という生産者の取組を消費者の視点と立場から伝える必要性も感じた。

Q. エコを特別栽培レベルへとあるが、実態的にはエコのレベルが高いものもある。今までの取組を崩さないようにしていきたい。

Q. エコチャレンジ認知はどの程度のものなのか。

A. 調査対象は全体でないが、エコチャレンジ85%、コア・フード30%という状況。

Q. 参加者全員が意見が出せる仕組みを作っていくようにしてほしい。

Q. 毎回、毎年同じ内容について議論することも必要ではないか。それによって議論の経過が生まれる可能性がある。

A. 10月に予定している青果フォーラムでは新しい運営スタイルを試みます。少人数制のテーブルで会議を運営するのはもちろん、参加者全員が意見を言わないと会議が進行しない仕組みを取り入れる予定です。少しずつ運営スタイルの改善も取組ます。

#### ◎ 谷口顧問、山本理事長からの「まとめ」

- 山本理事長：3・11で甚大な被害を受けた福島だが事業の建て直しが図られている。土台は組合員の結集力にあるところに注目したい。今、消費と生産が分断されている。唯一の存在。生産者も消費者であり消費者も農地に行く必要がある。新しい発想と構造を作ることが望まれる。2者の対立を生みず未来を作っていく団体に期待している。
- 谷口顧問：生消協のような大体は他には無い団体。ブロック会議の中での産地プレゼンなら更に奥深い実情などを出し合い相互理解できる場としてほしい。昨今の農業情勢に生消協として対極的議論を出来るようになってほしい。との



コメントをいただき、①ブロック会議の運営は参加者がより主体的になる運営を目指してほしい。②農薬削減プログラムは新しく入る産地が取り組み基準に合わせる努力をするようにしてほしい。③生産者も放射能問題や台風などの災害対応で疲れているのを感じる。④「未来への取組を進める時期にある」、東京中心の時代が5年、10年続くとは思えない。3・11以後人々の生活も意識も変わりつつある。産地にパレを作るという発想を持てるようにしたい。

## 《東北・北海道ブロック会議》 7/17～18 受入産地：JAみどりの 参加者 113人

### ◎ 東日本大震災後の東北・北海道ブロック産地からの報告

産地の取組を受入産地である「JAみどりの」を中心に「花兄園」「ポークランド」の3産地から報告を受けました。震災後の復興へ向けた取組内容を中心に具体的な事例報告を各産地から報告として受けました。

#### 1) 「JAみどりの震災復興、低減対策について」次の内容で報告がされました。

- ①水稲作付け 8,437 h a、小麦 765 h a、大豆 923 h a、不作付け地 409 h a。
- ②パルシステム米栽培研究会とJA内部に設置し技術研究等をしている。会員 200 名、435 h a。
- ③放射能低減対策としてパルシステム米を栽培する全ての圃場で実施。取組内容は「塩化カリの使用」「鶏糞燃焼灰の施用」を行い、土壤中のカリウムにセシウムを定着させることで稲への移行を防げることの紹介。
- ④生きもの調査プロジェクト活動、赤とんぼの羽化殻調査活動の報告。これらを通じ、使用される農薬を消費者と共に確認、二者認証制度の推進などに繋がると同時に環境保全と作物が命ある物からの恵という事の理解を深められる。

#### 2) 「花兄園からの報告」次の内容で報告がされました。

- ①福島農家は原発から3キロ圏内で人が近づけず壊滅。現在は宮城・岩手の農場から鶏卵の出荷。
- ②一時的に供給が出来なかった時期はパルの鶏卵産地が協力し代替供給してくれた。
- ③補償問題について東電と連絡を取り合うが、こちらの質問や希望への回答が無い状況が続く。

#### 3) 「ポークランドからの報告」次の内容で報告がされました。

- ①震災直後は飼料が届かず、多くの豚に餌を与えられない状況が発生。飼料米の備蓄がありかろうじて救える状況。この教訓から自給飼料施設の強化を考える。
- ②飼料米保管、メタン発酵発電、耕作放棄地再利用などの取組強化。
- ③国産原料100%飼料の追求。飼料流通の改善によるコスト低減。
- ④同時にバイオベッド豚舎増設でアニマルウェルフェア飼育の推進も行う。

### ◎ 参加者全体でのディスカッション

※3産地報告を受け、全体での意見交換を行いました。何かの結論を出すということではなく、自分たちの産地に照らし合わせた声を出してもらおうよう進めました。特徴的な内容は次の通り。

- ・施肥設計、ゼオライト対応で放射性物質の低減取組を行う。土作りの取組が正しい結果となった。
- ・飼料米（国産原料飼料）を配合できることが大事。飼料設計の施設を持っていたことが良かった。
- ・結果として国産への「こだわり」が震災からの影響を弱める形になった。
- ・産地は放射性物質低減の取組を行い、確かなデータを示している。消費者には風評被害に惑わされない認識を持ってほしい。農薬についても同じで、生産者は削減活動をしている事を理解し現場に足を運び自分たちの目で確認することをお願いしたい。
- ・農薬については消費者に伝わりにくいとを感じる。散布回数と成分使用回数は違う。特別栽培などは行政区の違いもあり、散布回数が少ないから良いというもの



でもない。毒性の強い成分が含まれているかどうかも重要。認証の仕方を見  
つめ直す必要を感じる。

◎ まとめ

要約して次の内容とします。

- ※ 放射能問題はまだまだ続く。5年、10年、それ以上の時間をともに過ごす形になる。表面的には見えない、もしくは見えにくいものが多く残っている。これらの課題も1つ1つ整理しじっくり対応していく事が大事。
- ※ ブロック会議を産地で行うことが本当に大事だということが実感できる内容だった。今後も東北・北海道ブロック内の各産地で開催し相互の交流と共感を強めていきたい。
- ※ 2013年度は、秋田南部圏協議会として受入をしたいと考える。



《関西以西ブロック会議》 9/1~2 受入産地 西日本有機農業組合 やさか共同農場 44人



やさか共同農場からのプレゼンテーション概要

- 40年前に有機農業が社会的に今以上に認識が無い時代に兵庫から島根の弥栄に就農。
- 有機農業の技術的向上を目指す。作物のローテーション、土作り、灌水技術など。
- 地域との調査に努力し地域へ溶け込む。地域からの恩恵も受ける。それが具体的な6次産業構造に結びつく流れとなる。
- 冬季期間の産業確保のため味噌作りを行う。年間を通じた仕事の確保と地域雇用へ貢献。
- やさか就農支援システムとして農業を志す人たちを応援する。
- 生産者を組織化する事が販路拡大に繋がることを集団で考え理解する。
- 今後の具体的な計画を個人が持ち、同時にやさか共同農場として「加工品」「生産組織(若者中心)」「面的拡大(JAS以外の生産物)」を主に取組む予定。
- 生消協のプロジェクトを受け、農場の自主点検取組みを開始。日々の確認、必要な表示、年間計画作成、監査委員接地など。

◎グループディスカッション報告

- 地域、行政とのかかわりが参考になった。
- 行政と連携して研修生を受け入れ、新規就農者として定着しているところが素晴らしいと思う。また、新規就農者でも生計が成り立っていくのも素晴らしいと思う。
- 味噌の加工を取り入れることで、年間通しての雇用が出来るようになった。



- ・ パルシステムに出荷している産地は、生消協に参加すべきではないか。自分たちがつくったものが、どう流通しているか分かったほうが良い。産地見学が出来てよかった。
- ・ 市況に影響されることなく、パルの成果を買い続けている組合員がいる。その組合員に産地としてしっかりアピールできているだろうか。
- ・ パルシステム、組合員、産地が一体になって、より美味しいものが栽培できるようにして行きたい。
- ・ 産地としての魅力作り、新しい人を入れていく、育てていくなど、そういう物語をつくっていく、産地のファンを作っていくことが大事。一人ひとり参加して物語を作っていく、盛り上げていくことが必要。

◎ まとめ

(原常務)

やさか共同農場の皆様ありがとうございました。農業をやりたいと思う若者はいると思うが、なかなかうまくいかないことが多いのではないかと。そこが定着できているのは、やさか共同農場の力が大きいのではないかと。自分たちが開拓者だったので、支援をしていけるのだろう。

消費者が来て、交流をすることが必要だけれども、それだけではない。売っていくためには、有機ということもあるけれど、感動のある美味しさが求められる。高くても買ってもらえるものを作っていくことが求められている。生産と消費は矛盾がある。もっと作りたい、必要なものしかいない、となる。この矛盾をどこに収めていくか。

(佐藤代表)

恐る恐る開催だった。地域は、生産だけががんばっても、消費者がきてもらっても変わっていかない。地域を変えるためには人が来てもらって、価値観を変えていかなければ。流通関係ともつながっていかなければ、変わっていかない。地域が変わっていかなければ、農村も存続しない。



※ 次年度は大阪府羽曳野市のなかむら農園を受入産地として開催予定。